

## 授業方法について独自に工夫していること 【人文社会科学系】

教員が教えるだけの一方的な授業ではなく、学生が互いに学びあう授業になるようにしている。とくに大学に入学したばかりの一年生の授業でもあるため、学生同士の交流のきっかけにもしたいという狙いもある。

言語に関して学生がこれまで考えてきたことがないような事柄を提示することによって、物事の多面的な捉え方の重要性を認識してもらいたいと考えている。

授業で扱う内容に関わる情報を予め準備する  
学生の視点にあうように、授業展開する

・「深く思考する力」や「主体的に行動する力」をつけていけるように、担当者オリジナルの「あらし読み」という手法を用いて、大学で必要とする読書教育からスタートさせました。平易な新書などから選書する体験を各自に行わせました。学内附属図書館は工事中でありましたが、初年次の半期10回で、受講生全員が、5冊以上の本をあらし読みしました。  
・学生の活動や交流を授業時間の2/3以上を当てました。毎時間、違った席に座り、違ったメンバーとペアになり、対話の相手を変え、伝える練習をしています。  
・「人は集中して文字が書ける時間を20分程度持つ」という過去の授業体験から捻出した時間を「20分間集中ライティング」と名づけています。授業中に、レポートの一部分を書かせる練習を取り入れました。  
・毎時間最後に、出席受講生に記入させている「紙のポートフォリオ」を用いて、毎時間の授業内容の確認や受講生自身の記録を振り返りつつ、10回を進めました。

できるだけ、学生達に習った中国語で自分の考えを表現することが出来るような練習を沢山させました。

継続して学習を続けられるように、1回ごとの授業の内容について検討し内容が多くなりすぎないようにつとめた。また課題をほぼ毎週出して授業外でも学習してもらえるようにした。

学生参加型にするために、リーディング演習では学生同士で内容を確認しあい、リスニング演習ではペアワークで内容を話し合い、そのうえで説明を加え、理解が深まるようにしています。

・学生同士ペアで、1分間程度で前回の授業内容の確認をさせてから授業に入ります。毎回おこなっているの  
で、学生も各自確認する姿勢が身に付き、授業にスムーズに入っていけるようです。  
・交流の時間を毎時間取り入れ、授業終了10分前に、授業の中で気づいたことや、他の学生から受けたアドバイスを次回どのように生かしていくのかを考えさせています。

教科書、補助教材などの選択に関して、言語学習の音声面での訓練を重視する立場から、最新のDVDもしくはCD付きのものにしている。学生が自主的にリスニングに多くの時間をさいてくれるよう、講義の最初にしお願している。それに加えて、自らが過去に欧米諸国(英語圏)に渡航した際入手した多様な資料を提示しながら、日本とは異なる文化面に注意を向けてもらうようにし、授業に新鮮味を持たせるよう心掛けている。

・学生が主体的に学習するよう、グループ発表や授業内容に関するコメントの提出を実施した。  
・できるだけ幅広く他国の文化に興味をもってもらうために、視聴覚資料も多く用いた。  
・講義は歴史や日本との関係を知ること、自己(自国)との関わりにおいて他国の文化を考えるということを意識した。

双方向的な授業の取り組みとして、毎回教科書の予習範囲から数名の生徒に自由に質問を出してもらい、教員が質問に答えるという形式で授業を実施した。

授業中常に教室の中を回り、理解できていなそうな学生に個別に指導する(机間授業)ことによって、きめの細かな語学教育が可能となった。語学授業においては学生とのコミュニケーションがもっとも大事なので、相手の了解を得た上で、できるだけ親しみを込めて名前を呼ぶことにしている。初級文法は忍耐が必要なので、教授者は根気よく繰り返し、同じことを伝えることが肝要なので、そのことに努めている。学生はその時は理解しているつもりになっているが、一知半解ということもあるので、何度も復習をして確かめるようにしている。

できるだけ学生が興味を持ちそうな教材を選ぶように努めている。また、授業が単調になるのを防ぐために、複数の教材を使用している。

できるだけ学生が興味を持ちそうな教材を選ぶように努めている。また、授業が単調になるのを防ぐために、複数の教材を使用している。

映画を素材にした教科書を用い、「文章の読解」と「英語の聞き取り」の両面を鍛えるような方向で指導をしている。また併せてベーシック・イングリッシュの理論に基づいた英語発話・作文の指導も、補足的にはあるが、指導している。

ベーシック・イングリッシュの理論をさらに日本人学習者向けに改善した独自の英語発話指導理論を用い、独自に編纂した教科書を使って指導している。

大学の授業の受け方、社会科(とくに歴史)の学び方、レポートの書き方、参考文献・資料の検索の仕方など、その方法や技能が身につくことに力点を置いた。授業中に学生が発言する場面を多くするように心がけた。実際に博物館に出向き、実物資料にふれることによって、社会科(とくに歴史)の見方が広がるように工夫した。

授業中の指示・説明言語をすべて英語で行っているわけではありませんが、内容理解等に重点を置いた活動では日本語で、そして英語を使うという技能中心の活動では英語で行うようにしています。そして、英語を1回の授業で少なくとも数度は発話するようにしていますし、ペアワーク・グループワーク等の活動も含めるようにしています。また、授業外での課題として、大学で使用可能なe-learningを用いています。

最近、アクティブラーニングの必要性が言われている。ぜひアクティブラーニングを取り入れたいが、そのためにはドイツで発行されたテキスト(たとえばMenschenなど)を用いるのがベストである。しかし今年には日本で発行された従来型のテキストを用いたため、部分的にアクティブラーニングを導入した。プリントを配り、ペア練習やグループ練習を試みた。しかしクラスの数が多いため、座席をコの字型に出来ず、どの程度効果があったかわからない。

テキストを使用して英語の文を解釈するが、そこから一歩踏み込んで関連のある記事を提示したり、テキストの内容に関する各自の意見を英語で書いてみたりペアワークで意見交換をしたりしている。

なるべく一人一人声を出してコミュニケーションを図れるようペア練習やグループ練習を取り入れた。とはいえ、それができない学生には、無理強い感のないよう配慮もした。

・英語を聞きとったり、発話したりすることに自信がない学生に対して、短時間で集中的に繰り返し聞いたり音読したりすることで、効果的に英語力を高めることを体験させ、習慣づけることを心掛けた。  
・この授業を受講することによって、英語という言葉の習得をすすめるだけでなく、将来本当に英語の必要性を感じたときに役立つ学習方法も同時に教えた。

講義と演習(タスク)を混ぜながら行うが、講義の部分も学生に考えてもらえるように、発問を投げかけて、仲間と話し合い、解答を解説するもしくは、学生に答えてもらうアクティブラーニングを意識している。

初めてTOEICを受験する学生も多かったことから、受験に際して知っておくことを中心に解説した。特に、TOEIC独特の頻出単語や熟語を覚えるために、毎回、単語の確認チェックをしたり、2單元ごとに確認小テストを行った。

テキスト自体は難しくはないので、語彙力や口語表現を中心に指導した。毎回、与えられたタスクに向かって、パートナーと一緒に会話をしながら解決していくようなアクティビティを重視した。まずは英語をどんどん使ってみることに慣れ、学習した表現をまねてみる、最後に自分の言葉で伝えるというような段階的指導をしてきた。

毎回コメントシートを配布、回収し、次の授業時に、その受講者のコメントを載せたプリントを作成してやはり毎回配布し、教員と受講者、また受講者間のコミュニケーション促進をはかる。